



Title: Reliability and Validity of the Closed-Course Version of the Standardized On-Road Assessment for Drivers (SOAD) With People With Mild Stroke

(軽度脳損傷者の SOAD 校内評価における信頼性と妥当性の検証)

Authors: Tatsunori Sawada, Seike Yosuke, Yuki Higashikawa, Kana Sakaue, Kounosuke Tomori, Kanta Ohno, Yoshio Fujita

澤田辰徳 (東京工科大学 作業療法学専攻 教授)、清家庸輔(高知県立大 講師 元工科大助教)、

東川裕樹(中伊豆リハビリテーションセンター 元工科大卒業生)、坂上夏菜(湘南慶育病院 元工科大卒業生)、

友利幸之介 (東京工科大学 作業療法学専攻 教授)、大野勘太 (東京工科大学 作業療法学専攻 講師)、

藤田佳男 (千葉県立保健大 教授)

Journal: American Journal of Occupational Therapy (2025) DOI: 10.5014/ajot.2025.051247

掲載年月: 2025 年 11 月

研究概要: 本研究は、軽度脳卒中患者を対象に、自動車運転実車評価である SOAD (Standardized On-Road Assessment for Drivers) の校内版の信頼性と妥当性を検証することを目的としている。108 名の軽度脳卒中患者を、5 施設のリハビリテーション病院と提携自動車教習所で評価を行い、古典的検定 (因子分析、内部一貫性、収束／弁別妥当性等) および項目応答理論 (IRT) を併用して、項目の識別力・難易度・構造モデルなどを分析した。最終的に、元の 40 項目から 16 項目に削減し、5 因子モデル (基本技能、運転態度、視野外の確認、危険予測、合流) が設定された。信頼性・妥当性ともに許容的な水準を示し、校内版 SOAD が有用であることを示した。

研究背景: 運転能力評価は、脳卒中後などの障害を持つ人々にとって、日常生活の自立性・移動性確保に直結する重要な課題である。医療や高齢者の分野では、実際の走行を用いた on-road 評価 (実車評価) が Gold standard とされているが、公道走行には法律的・安全的制約が伴う。また、評価ツール自身の信頼性、妥当性が十分に確立されている例は少ない。本研究はそれを解消する目的で設計された。

研究成果: これまでの研究で示された 40 項目から 16 項目へと項目を絞り込み、5 因子構造 (基本技能、運転態度、視野外の確認、危険予測、合流) という因子モデルを導出した。内部一貫性 (Cronbach's α) は .657～.829 の範囲であり、概ね許容可能な信頼性を示した。収束妥当性・弁別妥当性において、Average Variance Extracted が .482～.877、相関の二乗値との比較によって、因子間の区分性も概ね支持された。項目応答理論 (IRT) の分析結果では適切な項目特性が得られていた。これらの結果を総合すると、校内版 SOAD は、軽度脳卒中患者に対する運転能力の評価ツールとして、信頼性・妥当性の観点から実用的可能性が示された。

社会への影響: 近年、脳損傷者の運転に関しての医療機関への相談件数は増大している。本研究の意義は、作業療法士やリハビリテーション臨床家が、脳卒中患者などの運転可否判断を行いやすくなる。これにより、適切な運転継続または運転再開の意思決定支援が可能となり、利用者の生活の自立性・移動性の維持につながる。さらに、将来的には、このツールが各国での制度導入 (運転適性評価制度) に応用される可能性もある。法制度的制約が強い地域でも、運転評価の標準化・信頼性確保の手段として校内版 SOAD が活用されれば、政策・福祉・交通安全分野にもインパクトを及ぼすことが期待される。